

教育系大学院生による、小5 社会科「森林資源」の教材研究—1枚の写真を通して 日本の美「化粧垂木」をつくる—北山林業の見学から

作成：山崎貴子（京都教育大学 大学院1回生）
寸評：山下宏文（京都教育大学 教授）*

社会科教育学がご専門で林業・森林文化にも造詣の深い山下宏文先生は、大学院生の皆さんを引率して北山林業地域を訪れています。教育系大学院生の皆さんは将来教壇に立つとき、見学の折に撮影した1枚の写真を通して、子どもたちにどう語り、何を伝えたいと考えたでしょうか。山崎貴子さんが応じてくださいましたので、写真・語り・意図の3部構成でご紹介いただき、山下先生にはご専門から見た寸評をお願いしました。いわば誌上教材研究です。（編集室/吉田 功）



▲「化粧垂木」をつくる

「木の皮をむいているところです。この木はスギの木で、伝統的な日本の家の屋根に使います。この木は化粧垂木と言います。ヒノキの枝からつくったへらを使って、一本一本、手作業でむいていきます。力のいる作業です。

この作業ができるのは、8月だけです。8月は、木の生長が止まり、木が建築材料として使えるようになる月です。9月になると、皮がむきにくく傷が付きやすくなります。

上の枝や葉は残しておきます。それは、木の中の水分を葉から蒸発させて、より丈夫な木材にするためです。

職人さんの服装を見てみましょう。ヤニの汚れを防ぐために前掛けや腕カバーをしています。道具を腰に付け、すぐに取り出せるようにしています。また、木綿の布をいぶした煙で、蚊やブヨをよけています。

この後、素手で木に砂をこすり付けて、表面の薄い皮を取ります。つやのある木になります。これは北山スギの特徴です。

このようにして初めて、木は“木材”になります。伝統的な日本の家には、このような営みがたくさん詰まっています。」

○意図(山崎)：日常生活において、建設中の建物を見る機会はあるだろう。しかしコンクリートの家が多く、木造であっても加工された木材を組み立てているところを見るくらいである。この学習を通して、木材ができる過程を知り、その中にさまざまな工夫がなされていることを学んでほしい。そして、日本の林業や伝統的な技術を見つめ直すきっかけとなることを期待する。

○寸評(山下)：小学校の第5学年社会科では、「森林資源」の学習をする。この学習のねらいは、国土保全や水源かん養に果たす森林資源の重要性を理解することにある。さらに、森林資源の育成や保護に従事する人々の工夫や努力にも着目することになっている。ところで、森林資源の育成や保護のためには、森林資源を有効に利用する必要があることにも気づかせる必要がある。しかし実際の学習では、そこまで念頭に置かれることは少ない。そこで、この写真を通して、上手に木を使う日本の森林文化に子どもの関心を向けていこうとする試みは、とても意義のあることと考える。